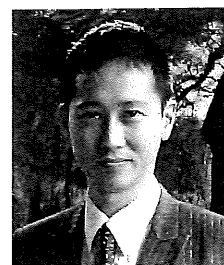


## 《巻頭言》

# 加速する台湾の断交ドミノ —「中華民国」の鎧を脱ぎ捨てる好機—



理事・拓殖大学海外事情研究所准教授 丹羽文生

中国による「台湾虐め」が凄まじい。2009年5月以来、8年連続でオブザーバーとして参加していたWHO（世界保健機関）年次総会は、中国の横槍で昨年に続き今年も招待状が届かなかった。来年8月に台中市で開催予定だった第1回東アジアユースゲームズも中国の妨害により中止に追い込まれた。

軍事面でも台湾の周辺海域で実弾演習を実施し、新型ミサイルの配備も進めている。表向きは中台関係の「現状維持」を唱えるも、独立志向が強く、中国が主張する台湾は「不可分の領土」であるという「1つの中国」原則を受け入れない民進党の蔡英文政権の弱体化を目論んだものである。

中でも台湾にとって深刻なのが断交ドミノである。サントメ・プリンシペ、パナマ、ドミニカ、ブルキナファソ、エルサルバドルと続き、その結果、台湾と国交のある国は僅か17カ国にまで激減してしまった。

それにしても、中国の遣り口は下劣極まりない。「金銭外交」攻勢によって、台湾と外交関係を持つ国に手を突っ込む。まるで札束で相手の頬を引っ叩くようなもので、責任ある大国としての矜持の欠片もない。

但し、この断交ドミノは考えようによっては台湾にとって好機になる可能性もある。言うまでもなく、これらの国々が断交した相手というのは厳密に言えば、台湾ではなく、台湾を実効支配している「中華民国」である。勿論、1972年9月の日中国交正常化に伴って日本が外交関係を

断ち切ったのも「中華民国」で、それはアメリカも同じである。

1933年12月のモンテビデオ条約や各種学説に基づけば国として認められる要件として、国民、領土・領域、統治機構、国際承認が挙げられる。誰がどう見ても台湾は国民、領土・領域、統治機構の要件は揃っている。憲法もある。元首もいる。軍隊も持っている。欠けているのは国際承認である。世界の大半から「中華民国」は国際承認を受けていない。

そのまま断交ドミノが続き、世界中全ての国が「中華民国」と断交すれば、「中華民国」は、この世から消えてなくなることになる。些か極端に思えるかも知れないが、故に、そのような状況になれば、台湾は「中華民国」の鎧を脱ぎ捨てて、本来の姿に戻るきっかけになるのではないだろうか。

台湾では1990年代後半の自由化、民主化の流れの中で、徐々に「『中華民国』からの独立」を求める声が高まっていった。日本では「台湾独立」とは「『中華人民共和国』からの独立」を意味するものと思われがちであるが、これは大きな誤りである。台湾は「中華人民共和国」による統治を受けてはいないし、過去、一瞬たりとも受けたこともない。「台湾独立」とは「『中華民国』からの独立」を指す。

今や「中華民国」は死語になりつつある。果たして、断交ドミノは台湾にとってピンチなのか、チャンスなのか。今後の行く末を静かに見守っていきたい。